

5 - 6 歳児における「かたちへの興味」に着目した造形活動

－シンメトリーの型を用いたステンシル技法－

山 中 慶 子

Artistic Activity Focusing on “Interest in Shape” at 5 - 6 years old

－Stencil Technique Using Symmetry Type－

Keiko YAMANAKA

キーワード：幼児、造形活動、図形、ステンシル技法

1. はじめに

1-1. 研究の背景

平成29年の3法令改訂により、乳幼児の教育の質を確保するため、要領・指針の保育内容の整合性が図られ、就学前施設のすべてが教育の場であることが示された。就学前教育では、幼児一人一人に応じたかわりをしながら、意図的な環境構成や総合的な活動を通して幼児の発達を促し、一人ひとりの小学校へのスムーズな接続が望まれる。そのために、要領・指針には具体的な「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が明記され、幼児教育において向かうべき姿が示された¹⁾。

また、幼稚園教育の基本では「教師は（略）幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共により良い教育環境を創造するように努めるものとする²⁾」と記されることから、保育者の子ども理解と環境設定の知識・技術は、就学前教育において必要不可欠な専門性であるといえる。

一方、小学校教育においては、生活科を中心としたスタートカリキュラムの中で、幼児期の終わりまでに育った姿が発揮できるような工夫がなされることが求められている。『小学校学習指導要領』では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園

教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」と記されており、幼児期に育まれた「見方・考え方」や「資質・能力」を各教科の学びにつなげていく時期であることを理解し、接続期教育を検討することの重要性が示されている²⁾。

1-2. 幼児期の「かたち」への興味

幼児は生活の中で遊びを中心とした活動を通してさまざまなモノに出会う。「かたち（図形）」もその中の一つである。モノには「かたち」があり、「かたち」にも名前がある。そのことに気づき、興味を持ったり、「かたち」を遊びや生活の中に取り入れ、主体的に活動を展開していけることは、見立て遊びなどで想像力を育んだり、似たものの分類や標識の意味に気付くことにもつながる。これは、小学校生活科や算数科の基盤になるだけでなく、生活の中でも必要となる知識や体験であり、生きる力を育むことにもつながると考えられる。

領域「環境」のねらいでは「（3）身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」とある。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿（8）数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」では、「遊びや生活の中で、数量

や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚を持つようになる」と示されている¹⁾。

幼児期に数量や図形、標識や文字に親しみ、遊びの中で活用したりすることは、小学校教育への接続に必要な体験であると考えられる。「かたち」の認識は、算数科に繋がるものではあるが、丸、三角、四角など身の回りにある物の形に気づき、同じ形を見つけたり、形から他の物を連想したりする遊びを通して、幼児が自ら生活に活用し、感覚を豊かにすることが幼児教育においてのねらいである。保育者は、生活の中で、自然に幼児の「かたち」への興味関心が芽生えるような環境を構成することが望ましいと考える。

1-3. 描画における発達段階

「かたち（図形）」は、領域「環境」の中で取り上げられるが、領域「表現」の造形表現においても重要な題材となる。発達段階による形の認識や、描画において出現する形の特徴的な表現について、これまでに多くの研究が為されている。

子どもの描画における発達段階には個人差があり、固定的なものとして捉えることには注意が必要だが、保育者は一般的な幼児の発達を理解するための目安として確認しておく必要がある。代表的な研究として、ハーバード・リード (H.Read, 1893~1968)、ローダ・ケログ (Rhoda.Kellog, 1898~1959) ローウェンフェルド (V.Lowenfeld, 1903~1960) らによる描画分類や発達段階説が挙げられる²⁾。

子どもの形への目覚めは、1歳前後頃のスクリブル（なぐりがき）とされる。肘や腕の運動機能の発達によって縦の線、横の線が描けるようになり、肩や腕、肘の動きをコントロール出来るようになると、渦巻き状の線描も見られるようになる。

2歳頃になると、ぐるぐるとした円スクリブルを描くようになり、やがて閉じた単独の円が出現する。子どもにとってはこの円が一つの独立した形として意味を持つようになり、意味づけを行うようになる。

3～6歳頃になると、円の中に点や円を描いたり、円と線を組み合わせたりして描き、「頭足人」と呼ばれる特徴的な表現が表れる。

4～5歳では、基底線を基準として花や家など絵記号のような形を組み合わせる絵を描こうとする。身の回りの形象を図式的に表現しようとする時期である。

島田 (2014) によると、5歳児は理解力や描写力、イメージ力が発達することから、男女ともに見立て遊びを好むという。図形による調査においては、見立ては色よりも形が優先され、図形の中でも三角形の選択率が高いという結果を得ている⁴⁾。

また、小学校就学前である5歳前後は、身の回りの形象を図式的に表現しようとする時期であり、形による見立て遊びを好む時期でもある³⁾ことから、「かたちに着目した遊び」を展開するのに適した時期であると考えられる。

2. 幼児の図形感覚に関する先行研究

東尾 (2018) は、幼児期の自発的活動としての「形遊び」を取り上げ、立体図形の構成要素としての面や形の機能を活かして遊ぶ（積む、転がす等）姿、また形遊びの中で幼児が表出する言語を調査し、形の認識や感覚は幼児が遊びを通して身につけた資質・能力であることを確認している⁵⁾。

一方、岩崎ら (2019) は、「幼児期から小学校入門期における接続期は、幼児期から引き続き直接体験を中心にした指導を実施しながら、幼児期に体験してきたインフォーマル算数を基盤にすることで、具体物から半具体物を介して論理的思考へと深化していくものと考えられる」とし、生活体験の不足や就学前教育を経験していない子どもの数量・図形に関する体験不足が小学校入門期の困難へとつながることを指摘している⁶⁾。

以上の研究から、幼児期の形遊びは小学校教育へのスムーズな接続に有効であり、反対に、数量・図形に関する生活体験の不足が小学校入門期の困難につながるということが明らかにされている。保育者が、幼児が図形の感覚をどのように身につけ、どのように生活に結び付けていくかを検討しながら、

表1. 基盤となる形のタキソノミーテーブル

知識の次元	認知プロセス		総合的な次元	
	ステップ1 (年少3歳～4歳頃)	ステップ2 (年中4歳～5歳頃)	ステップ3 (年長5歳～6歳頃)	
	思いついたり知る時期	適応したり分かる時期	応用化したり内面化する時期	
認知領域	事実的知識	<ul style="list-style-type: none"> 線や点、圓や楕圓を用いる。 線で囲うことで内と外を分別する。 形の大小や長短を理解する。 丸や四角などの形の違いを分類、区別できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 線や点、図形の組み合わせで形を捉える。 線から面への意識の広がりがみられる。 三角の形の理解が深まる。 	<ul style="list-style-type: none"> 大きさや位置など形同士を関連付けられる。 面から立体、空間への意識の広がりがみられる。 構想やデザイン性を考えるようになる。 色反応有意から形反応有意へ移行し始める。
	概念的知識	<ul style="list-style-type: none"> 知っているものを描こうとする。(知覚的描写) 円や楕圓を対象の量感として把握する。 描いたものに意味づけをする。 外界を象徴することはまだ難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 知覚的描写から視覚的描写への移行期。 基底線が現れ、上下左右の空間意識が生まれる。 外界の形象を象徴化できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 見たものの性質や特徴を象徴的に表そうとする。(視覚的描写) 眼に見えるもの見えないものを一緒に描く。 形象を図式化、一般化して表せる。(類似視)
精神運動領域	手続的知識	<ul style="list-style-type: none"> 円を基準にして線や点を加えて形を表す。(頭足人など) 主に線、点、円で絵を描く。 形を重ねることに抵抗がある。 触感を働かせながら対象を把握しようとする。 非合理表現(透視画、多視点画、擬展開図等) 	<ul style="list-style-type: none"> 形や量の概念が現れ、バランスや構造を気にしながらものを作ることが出来る。 円や楕圓に縦横の線を加えて描く。 物同士の関連や空間意識はまだ弱く、形を羅列的、並列的に描く。(カタログ期) 	<ul style="list-style-type: none"> 眼と手の同調性が高まり、物の形や特徴を捉えることが出来る。 斜めの線で生き生きとした動きを表せる。 基底線や積立図を用いて上下左右、奥行き等の空間秩序を表そうとする。 形同士を関連させられる。
情意	情意プロセスの次元			
	1. 試み・反応	2. 意味づけ・一般化	3. 受容・認識	
	<ul style="list-style-type: none"> 自己中心性が強く、興味が従い衝動的な行動をする。 描画活動と言語表現の混じり合いが盛んになる。 ものの一部のみを観察するため、全体制は乏しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 注意力は未だ局所的 表出から伝達を含む表現へと移行。 形見つけや見立て遊びを好むが、見立てたものを線画で表すことはまだ難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 型にはまりかけたり、自意識で絵が描けなくなる子がでてくる。 目的意識や見通しをもって作品が作れる。 客観性が育ち、他者の視点で物事が考えられる。 写実性への関心が高まる。 	

※廣瀬⁷⁾作成のタキソノミーテーブルから、形に関わる部分を筆者が抜粋し、作成。

楽しみをもって主体的に取り組むことが出来る環境を構成することは必須であると考える。

造形分野では、幼児期における造形活動において、廣瀬(2020)が、色と形に関する事項に焦点をあて、色と形に関わる資質能力を細かく体系化したタキソノミーテーブル(表1)を作成し、子どもの発達段階に応じた造形支援の在り方の探求を行っている⁷⁾。

3. 目的

上記の研究から、「かたち」に着目した造形支援は幼児期の体験として必要であり、幼児期の形遊びは小学校教育へのスムーズな接続に有効であると考えられる。

本稿では、幼児が「かたち」に着目し、楽しみながら主体的に取り組める造形活動を提案し実践することで、幼児期の造形活動について示唆を得ることを目的とする。また、活動を通して、幼少接続期である5歳児の図形に対する好みや認識について調査、考察することを目的とする。

4. 方法

幼児期の基盤となる形のタキソノミーテーブル(表1)より、認知領域、精神運動領域において形を応用化したり内面化したりする時期である年長児(5～6歳児)を対象に、かたちに着目した造形表現活動を行う。活動名は『みつけたよ! いろんなかたち』とする。二つ折りにした用紙を切り抜いてできるシンメトリー(線対称)の型紙を作成し、出来た型紙を使って、絵具によるステンスル技法を楽しむ約60分の活動である。活動の様子は、ビデオ撮影によって記録する。

造形活動は、園内の先生方にも参観して頂き、「幼児の発語や行動」「活動の発展の可能性」について簡単なメモを取っていただき、指導者だけでは確認できない発語や行動について情報を得る。活動終了後、幼児が作成した型紙を収集・分類し、幼児の図形に対する好みや認識について調査、考察する。

4-1. 幼児の実態と技法の選択

年長児のクラス担任によると、対象幼児は、本

などで形を予想して選ぶといった経験はあるが、折った紙をはさみで切り、自ら形を作る活動については未経験である。幼児は、丸、三角、四角などの基本の形は認識しており、生活の中での見立て遊びや、立方体や球体の遊具を組み合わせる遊びを考える姿が日常の中で見られる。

画用紙を切り抜くことで版ができるステンシル遊びは、幼児から楽しめる版表現のひとつである。タンポによる着色は、押したたいたりする行為に因るものであり、幼児の表現意欲や関心を高める方法でもある。形や色の重なりを楽しみながら、型紙を使った版表現の面白さに気付くことができる実践である⁸⁾。

幼児の造形活動において、カッターを使用することは難しいことから、二つ折りにした用紙をはさみで切り抜くことによって型紙を作ることとする。この際の型紙はシンメトリーの形となる。「切り取った用紙を開くとシンメトリーの形になる」という仕組みに気付き、出来上がりの形をイメージして切り込みを入れる幼児と、無意図に切り込みを入れ、できた形に意味づけをする幼児に分かれることが推測される。または、出来上がりのイメージはあるが、どのように切り込みを入れたらよいのか分からないという幼児もいると考えられる。

4 - 2. 評価について

造形表現活動を通して、幼児が「かたち」に着目し、主体的に取り組める活動を実践できたか否かは、活動中の幼児の言葉や模倣の有無に着目する。幼児は、はさみで無意図的に切り込みを入れることで偶然に新しい「かたち」を発見したり、意図する形を切り出すためにはどのようにはさみを入れればよいのかを考えたりするであろう。二つ折りにした用紙を開いたときの幼児の発語によって、シンメトリーの形についてどのような認識を持っているのかを調査し、考察する。また、友達の活動を模倣したり、教え合いながら活動を進めたりする幼児の対話・行動を分析し考察する。

活動終了後、幼児が作成した型紙を分類し、幼児の形の好みや、シンメトリーの形を作成するま

での思考について調査し、幼少接続期である5～6歳児の図形に対する好みや知識について考察する。

5. 実践と結果

活動名：『みつけたよ！いろいろなかたち』（表2）

内容：用紙を二つ折りにし、切り抜いてできるシンメトリー（線対称）の型紙を作成する。出来た型紙を使って、絵具によるステンシル技法を楽しむ。

対象：年長児（5～6歳児）34名

5 - 1. 「かたち」を見つけて型紙を作る活動

年長児2クラス（34名）を対象に活動を行った。幼児には、活動の内容は伝えず、鉛筆とはさみを準備するよう伝えた。

二つ折りにした用紙（13cm×20cm）の折目に赤線を引いておき、「赤からスタートして、赤で終わる線を鉛筆で描きます」という説明をしながら、実際に幼児の前で直角三角形を描き、はさみで切り抜いた。「開いたら、何の形になるか」という問いを投げかけると「三角」「お山の形」など、開いたときに出来ると考えられる形を予想して答える姿が見られた。

同様に、二つ折りにした用紙にランダムな線を描き、切り抜いた。「開いたら、どんな形になるか」と問いながら開いて見せると、「宇宙船みたい」「ブロッコリーだよ」「お魚」などの声が上がった。

2つの例を掲示し、「自分の好きな形を予想して切り取る」、若しくは「自由に切った形に後から〇〇の形と名前をつける」のどちらでも良いことを説明した。「赤い線から始まり、赤い線で終わる」という型紙づくりのポイントを伝えた後、画用紙を配布した。画用紙は、用紙A（H13cm×W20cm／横辺中央に垂直に赤線をひいたもの）、用紙B（H13cm×W20cm／縦辺中央に垂直に赤線をひいたもの）の2種類を用意し、どちらを使用しても良いこととした。配布した画用紙の切り抜きが終わっても、追加で用紙を取って製作して良いことを伝えた。指導者は、幼児の活動を見守り

ながら、どんな形ができたかを尋ねた。

表2. 造形表現活動計画

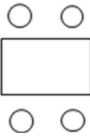

造形表現活動計画		対象：年長児 34名		
活動名 みつけたよ！いろんなかたち		子どもの実態／育ちの願い 日常生活の中で様々なモノの形に興味をもち、遊びの中でそれぞれの形の特徴を活かして活用している様子がみられる。ステンシルの造形遊びを通して、形の仕組みに気付いたり、身近な形や色への興味を深めたりしてほしい。		
ねらい：二つ折りの紙を切って開いたときに出来る形の面白さに気づき、形への興味を広げる。 ステンシル技法で色をつけることで、重なる形や色の美しさを感じる。 内容：○ハサミを使って好きな形を切り取り、開いたときに出来る形との違いに気付く。 ○開いたときに出来る形をイメージし、見通しをもって形を切る楽しさを知る。 ○友達が切り取った形と比べながら、形の違いの面白さに気付く。				
材料・用具	環境構成	時間	子どもの活動／予想される動き	保育者の援助
鉛筆 用紙 A 用紙 B	1 テーブルに 4人で着席	0.00	・鉛筆・はさみを準備して席に座る。	・各自、はさみ・鉛筆が揃っているか確認をする
はさみ		0.05	・保育者が切り紙をする様子を見る。 ① 「ひらいたら、何の形かな？」(三角形)の質問に「おにぎり」「お山」など、連想する形を言い合う	① 二つ折りの画用紙を直角三角形に切り取り、開いて何の形に見えるかを問う。 ② 二つ折りの画用紙をランダムに切り取り、開いてみせる。「何に見えるかな？」と問いかけ、イメージを膨らませられるような言葉かけを行う。
新聞紙 手拭き タンポ	中央に赤線を 引いた画用紙 	0.15	・中央に赤線をひいた用紙を、赤線で半分に折る。「赤線からスタートし、赤線で終わる」ように鉛筆で線を書く。 ・線に沿って切り取る。 ・開いて、何の形ができたか、保育者や友達に伝えあう。	・用紙 A を配布し、中央の赤線で半分に折るよう伝える。 ・赤線から始まり、赤線で終わるように鉛筆で線を書くよう伝える。 ・線のうえをはさみで切るよう伝える。(曲線などは、紙を動かしながら切ると良いことを伝える。) ・開いてみて、何の形ができたか、数人に尋ねる。
スタンプ台 (6色)	 スタンプ台 (6色：赤・黄・青・緑・オレンジ・紫) 各色タンポ	0.40	・保育者が、切り取った型紙を使ってステンシルを行うのを見る。 ・自分で切り取った好きな型紙を、画用紙の上ののせ、タンポで好きな色をつける。 ・型紙を外し、形が出来ているか確認する。 ・色を変えたり、ステンシルの場所を考えたりしながら、製作を行う。 ・友達と型紙を交換したり、出来た形を見比べたりしながら、ステンシル技法を楽しむ。	・指導者が切り取った型紙を使って、ステンシルを行う。 ・子どもたちに、好きな型紙を選ぶよう伝え、絵具台とタンポをそれぞれの机に用意する。 ・大きな画用紙を配布し、好きな型紙と色でステンシルを楽しむよう促す。 ・子どもたちの様子を見ながら、製作に戸惑っている子には援助を行う。 ・友達と型紙を交換しても良いことを伝え、形の面白さを感じられるように促す。
		1.00	・記名をし、乾燥場において乾かす。	・作品は、名前を書いて乾燥場に持っていくよう伝える。



写真1. 幼児が切り取った「魚の型紙」



写真2. 偶然に出来た「しずくの型紙」

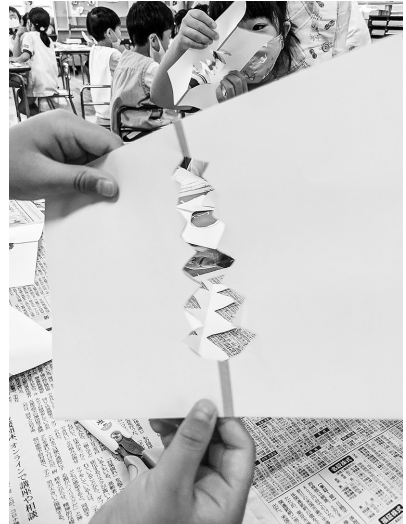


写真3. 「モミの木」から「サメの歯の型紙」へ



写真4. 飲み口が2つの「ペットボトルの型紙」



写真5. 複雑な形の型紙



写真6. 「恐竜の赤ちゃん」から「クマの型紙」へ

幼児の活動を以下に挙げる。

- 半円をつなげて2つ描き、切り取る。「魚の形」になった。(写真1)
- なだらかな弧を描いて切り取ると、偶然「しずくの形」になった。(写真2)
- 「クリスマスの木」の形を作ろうと思ったが、「サメの歯」のような形になった。(写真3)
- ペットボトルの上半分を描いて切り取ると、飲み口の形が2つになった。(写真4)
- 複雑な形を鉛筆で描いたが、切り抜くことが難しく、時間をかけて丁寧に切り抜いた。(写真5)
- 「恐竜の赤ちゃんの形」を切り抜き、開くと、

「クマの顔の形」になった。(写真6)

- 赤線を頂点にしてハートの形を切り抜き、開くと「蝶々の形」になった。
- 「先生、これ、何の形に見える？」と問いかけてくる幼児もいた。

1枚目は、シンプルな四角形や楕円形を切り抜く幼児が多くみられたが、枚数を重ねるにつれて、曲線や直線を組み合わせて複雑な形を作成する様子が見え始めた。また、友達が切り抜いた型紙を見て、「どうやってつくったの？」などと聞き、模倣する姿も見られた。準備していた150枚の画用紙は、全て型紙づくりに使用された。



写真7. 一つ一つ丁寧にステンシルされた形



写真8. 重なり合う色と色



写真9. 向きと色を変えてステンシルされた形

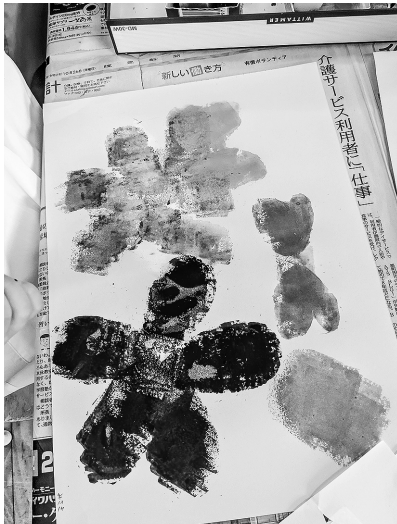


写真10. 楕円型を使った花の形



写真11. 偶然に出来た蝶の形



写真12. いろいろな形を並べたステンシル

5-2. ステンシル技法による着色

型紙づくりが終了した頃、自分が作成した型紙を使って、ステンシル技法を行うことを伝えた。見本として、活動の最初に作成した三角の型紙を画用紙の上に置き、ポスターカラーをスポンジに染み込ませ、叩くように着色し型紙を外すと、色のついた三角が現れ、幼児からは「すごい」「マジックみたい」との声が上がった。

各机に6色のスタンプ台を用意し、スポンジを使ったタンポで着色するよう促した。幼児の活動を以下に挙げる。

○一つ一つの形を丁寧にステンシルし、ゆっくりと型紙を持ち上げ、形を確かめた。(写真7)

○形と形を重ね、「違う色に見える」ことを発見した。(写真8)

○同じ型紙を、さまざまな方向に向かって置き、色を変えてステンシルした。(写真9)

○楕円形の型紙を使って、花の形になるようにステンシルを行った。中心の部分は、スポンジで黄色を直接スタンプした。(写真10)

○蝶々型の型紙でステンシルをした後、裏返して型紙を使うと、ピンクが着色された。(写真11)

○友達と型紙を交換しながら、さまざまな形のステンシルを行った。(写真12)

型紙通りに色のついた形が現れることに興味を持ち、向きを変えたり、型紙を裏返したり、形が

重なるようにステンシルを行う姿が見られた。友達と型紙を交換したり、どのような力加減でステンシルを行えば良いかを教え合ったりする姿も見られた。

5-3. 型紙の分類

幼児が作成した型紙を、活動後に収集した。用紙A、用紙Bに区分し、類似した形ごとに分類した。「円形・楕円形」「四角形」「ひし形」などの図形の外、幼児が意図して作成した、若しくはそのように見えることから名付けられた形「ハー

ト・蝶」「さかな」「しずく」の 카테고리も加えた。また、型紙の位置の特徴として、用紙いっばいに切り取られた型紙と中央に小さく切り取られた型紙、中央線に沿った型紙が見られたため、「大きい形」「小さい形」「中央線に沿う形」の 카테고리も加えた。その他の形は、幼児が意図して切り取った形と無意図に切り取られている形があると考えられたが、形の構成の特徴から「直線的な形」「曲線的な形」の 카테고리を設けた。

幼児が作成した型紙を、それぞれの 카테고리に分類した。複数の 카테고리条件に適合する型

表3. 幼児が切り取った型紙の分類

型紙例	用紙 A		型紙例	用紙 B		合計
						
	円形・楕円形	9		円形・楕円形	0	9
	四角形	3		四角形	4	7
	ひし形	4		ひし形	4	8
	ハート・蝶	1		ハート・蝶	3	4
	しずく	1		しずく	5	6
	さかな	0		さかな	3	3
	大きい形	5		大きい形	13	18
	小さい形	3		小さい形	0	3
	中央に沿う形	4		中央に沿う形	9	13
	直線的な形	12		直線的な形	10	22
	曲線的な形	14		曲線的な形	4	18

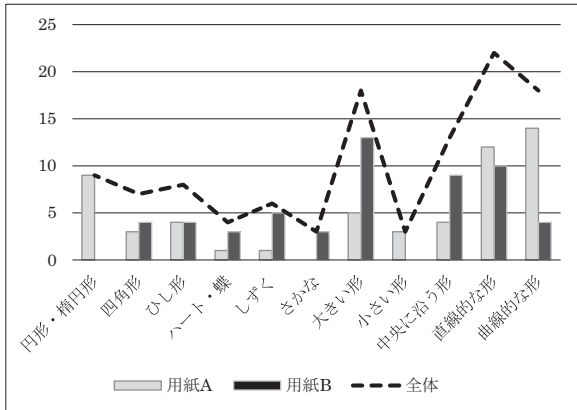


図1. 図. 形の分類による型紙の数

紙については、分類の優先順位として、1. 形に名前がある、2. 極端な大きさや形の特徴がある、3. 形の構成の特徴（直線的／曲線的）の順に分類を行った（表3）。図1は、用紙A、用紙Bの形の分類によるそれぞれの数値と、全体の数値をグラフで表したものである。

6. 考 察

6-1. 「かたち」に着目した造形活動について

本研究の造形活動実践は、「かたちを切り抜いて型紙を作る活動」と「ステンシル技法を用いて絵具で着色する活動」で構成した。造形表現活動を通して幼児が「かたち」に着目し、主体的に取り組める活動を実践できたか否かを、活動中の幼児の言葉や模倣の有無により考察する。

「型紙を切り抜く活動」では、二つ折りにした用紙をはさみで切り取るとシンメトリーの型紙が出来ることを幼児が面白いと感じ、形への興味を広げ主体的に取り組む意欲を持つことが重要であった。指導者が、二つ折りの用紙を切り取り、「どんな形になるか」という問いを投げかけ導入を行うことで、幼児の興味は「かたち」へ向かったと考えられる。導入部分で「○○になった」「○○に見えるよ」と形の変化に気付いたり、形からイメージを広げたりすることで、活動への欲求が高まり幼児の主体性が育まれたと考える。また、用紙の折り目に赤線を引き、「赤からスタートし、赤がゴール」の設定をすることで、用紙の中央に形が現れ、全ての幼児が「自分で形を作ることができた」という達成感を味わうことができたこと

えられた。用紙を広げた際に、「みて。こんな形ができた」「○○みたいになった」という発語があり、更に別の型紙を作ろうとする姿から、幼児が主体的に活動に取り組んでいることが確認できた。

中には、赤線ではない箇所から切りこみを入れたらどうなるかを実験的に行う幼児もいたが、中央に形が現れないことを確認し、新たな用紙で型紙を作る姿も見られた。

幼児は、最初は四角形や円形などの単純な形をイメージして切り取っていたが、枚数を重ねるにつれて、辺や角の多い複雑な形を切り取る姿が見られた。単純な形で仕組みを理解し、より複雑で面白い形を探求しようという意欲の表れであると考える。表3の形の分類では、「直線的」「曲線的」の分類を行ったが、幼児の発語の中には「クリスマスの木」「恐竜の赤ちゃん」「ペットボトル」「にんじん」などがあり、イメージをもって形を切り取ろうとする試みがあることが確認された。

型紙を作成する際、幼児が友達の作った形を見て、どのように作ったかを問いかけ、切り方を模倣する姿が見られた。他者の作った形に興味をもち、形の仕組みを知ることによって、幼児の図形への興味は広がり、知識として積み重ねられていくことが予想された。

ステンシル技法による着色の場面では、技法の手順のみ伝えたため、幼児の自由な画面構成が見られた。形を丁寧に並べてステンシルを行う、形と形をずらしながら重ねていく、形を他の物に見立てながら絵を描くように画面を構成する、形を重ねて色の混ざりを楽しむ等、様々な方法で画面全体にステンシルを行う姿が見られた。型紙を裏返して使用する姿も見られ、自分で考え工夫しながら表現する姿が確認された。

半分の形をイメージして型紙を作成する、または偶然出来た形から想像を広げる活動を通して、幼児の図形への興味は深まり、探求心をもって主体的に活動に取り組む姿が確認された。また、ステンシル技法によって、自分の作成した形が着色され画面を構成することによって、表現を工夫したり、気づいたり、不思議さを感じたりしたこと

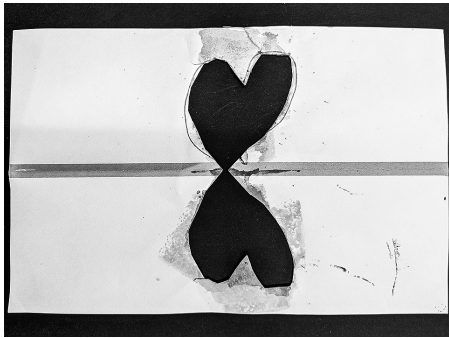


写真13. 折りたたんだ状態でハートを切り取った型紙

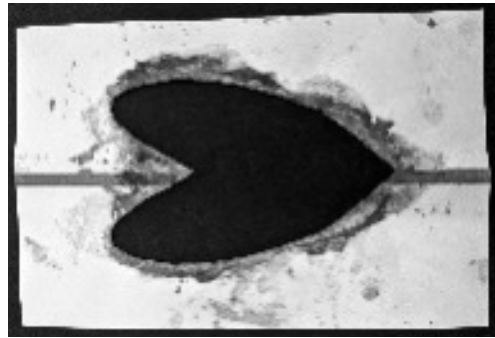


写真14. 開いた時のハートをイメージした型紙

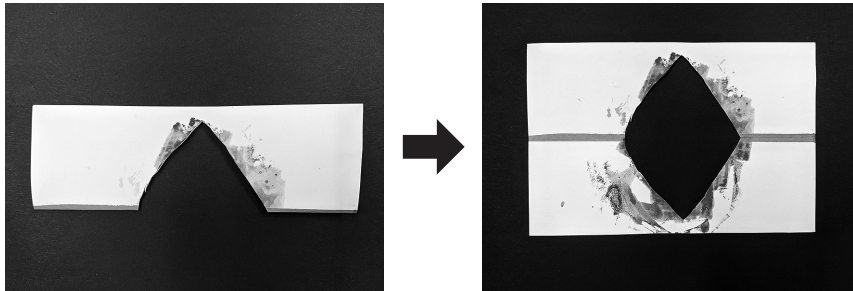


写真15. 折りたたんで切り取られた「三角形」は、「ひし形の型紙」へ

が、幼児の行動・発語から推測された。

6 - 2. 幼児の図形の嗜好

本研究の造形活動では、2パターンの用紙を用いた。用紙のサイズは同じであるが、用紙Aは、折りたたむと縦横比が約4 : 3であり、用紙Bは、折りたたむと縦横比が約1 : 3である。

用紙Aでは、円形・楕円形の型紙が9枚あったのに対して、用紙Bでは0枚であった。また、用紙Aでは曲線的な型紙が14枚に対して、用紙Bでは4枚であった。これは、形をイメージする際に、折りたたんだ用紙の縦横比が関係していると考えられる。幼児は、正方形に近い形では、丸みを帯びた図形をイメージするが、縦横比が極端に異なる用紙からは曲線的な図形は連想し難いことが推察された。

また、用紙Bでは画面いっぱいの大きい形が13枚見られ、小さい形は0枚であった。また、中央に沿う形も9枚あり、用紙Bの長い折目が、図形イメージの喚起に影響していることが考えられた。全体的な数値では、小さい形は3枚であるのに対して、型紙いっぱいの大きい形は18枚であった。

小さい形よりも、大きな形を切り取りたいという幼児の心情が推察された。

ハート型においては、2パターンの切り取り方が見られた。半分に折られた状態で完成したハートを切り取った幼児からは、開いて「蝶々になった」という発語があった。これは、開いた形をイメージして切り取ったのではなく、「ハートを切り取ったつもりが蝶の形になった」という偶然出来た形である(写真13)。一方、開いたときにハート型になるよう、ハート型を半分にした形を頭の中でイメージし、切り取った幼児もいた(写真14)。5～6歳児において、シンメトリーの形を頭の中でイメージし、半分に折りたたんだ形を想像する力には差があると推察された。

活動の最初に、指導者が幼児の前で三角形を切り取ったため、三角形を切り取る幼児がいるであろうと推測したが、三角形の型紙は0枚であった。基本図形としての円形、楕円形、四角形、ひし形の型紙はそれぞれあったため、幼児は自分が知っている形をイメージし切り取ったと推測される。しかし、開いたときに三角形になるためには、折りたたんだ状態で直角三角形を切り取る必要があ

り、幼児にとってイメージすることが困難であったと考えられる。折りたたんだ状態で切り取られた三角は、開いた時にひし形の型紙となり、三角形の型紙は0枚という結果となったことが推測された（写真15）。

7. ま と め

本稿では、幼児が「かたち」に着目し、楽しみながら主体的に取り組める造形活動を提案し実践することで、幼児期の造形活動について示唆を得ることを目的とした。また、活動を通して、幼少接続期である5～6歳児の図形に対する好みや認識について調査、考察することを目的とした。得られた結果を以下に示す。

- (1) 図形の半分の形をイメージし、シンメトリーの型紙を作成する、または偶然出来た形から想像を広げる活動を通して、幼児の図形への興味は深まり、探求心をもって主体的に活動に取り組む姿が確認された。
- (2) 自分で作成した型紙を使用してステンシル技法を行うことで、色や形の重なり方や画面構成など、表現を工夫する姿が見られた。また、活動を通して、友達が作成した形との違いに気づいたり、共にイメージを膨らませたりし、図形に対する知識や認識が育まれることが、幼児の行動・発語から推察された。
- (3) シンメトリーの型紙イメージでは、折りたたまれた用紙の縦横比が関係すると考えられた。正方形に近い形では、丸みを帯びた図形をイメージし易いが、縦横比が極端に異なる用紙からは、曲線的な図形を連想し難いことが推察された。
- (4) 5～6歳児において、シンメトリーの形を頭の中でイメージし、その図形の半分の形を想像する力には個人差があると推察された。特に三角形については、半分に折りたたまれた形のイメージが困難であると考えられた。

幼稚園教育要領解説には「花びらや葉、昆虫や

魚の体形など、幼児の身の回りの自然界は多様な形に満ちている。幼児がこのような形に触れたり、教師が注目を促すことを通して、様々な形に気付いたりして、次第に図形に関心を持つようになることが大切である」⁸⁾と記されている。保育者には、幼児が興味関心をもって自ら数量や図形に関わろうとする環境を工夫し、援助していくことが求められるといえる。

造形活動を通して、形から自然の植物や生き物を連想したり、形と形を組み合わせる創造したり、表現を工夫することは、物の性質に対する感覚を豊かにすることに繋がると考える。このような経験が、不思議さや達成感と共に幼児の記憶に残り、図形に対する興味関心を引き出すきっかけとなることが望まれる。また、小学校からの学びにスムーズに繋がるような体験や、自ら問題を見つけ解決していこうとする姿勢が、幼児期の造形活動を通して育まれるよう配慮することは、就学前教育を担う保育者の役割であるといえよう。今後も、幼児が楽しみながら主体的に取り組む、生活に活用したり遊びに取り入れたりすることで豊かな感性を育むことのできる造形活動について研究を深めていきたい。

謝 辞

本研究にご協力くださったT幼稚園の理事長、園長、主任、教職員の方々、園児の皆様に深くお礼申し上げます。

註

- 1) 『平成29年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド本社（2017）pp.7-9、18-19
- 2) 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版、p21
- 3) 藤田雅也（2018）『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』（樋口一成編）萌文書林 pp.218-221
- 4) 島田由紀子（2014）「幼児の図形からの見立て描画にみられる初発反応」和洋女子大学紀要 vol.54, pp.50-57
- 5) 東尾晃世（2018）「幼児が身につけた資質・能力を活かした算数科の指導－「かたち」に着目して－」大阪総合保育大学紀要 第13号, pp113-126
- 6) 岩崎淳子・渡辺恵津子（2019）「幼児期から小学校

入門期の接続を考慮した数量・図形の学び（1）経済的困難を抱えた子どもの学びを中心に」教職課程センター紀要 第4号, pp.45-56

7) 廣瀬敏史 (2020) 「色と形を軸にした幼児造形プログラムの構築-タキシノミーテーブルの開発と実践を通して-」東海学院大学研究年報5, pp.59-68

8) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレール館, p.203